

人と自然が共存できる里山回復を目指した活動

## 夏至の頃

6月初旬、梅雨入りを目前に東日本や北海道では気温が上昇、北海道では記録的な暑さと真夏日が連続しました。

強い陽射が照りつける田んぼは水位が下がり、田んぼに引き込む水量も弱く、急ごしらえで掘った池も僅かな水溜り状態、今年も水不足になりました。

田んぼの水位が下がり、シュレーゲルアオガエルが畦に産み付けた泡巣を狙って、夜な夜なタヌキやハクビシンが餌場として利用、掘り取られた多くの痕跡、無残な泡巣の一部が目立ちます。田んぼの中まで侵入した足跡が残っています。

6月3日、四国地方が梅雨入り、5日には関東甲信地方も梅雨入りして、夕方から本格的な雨になり、7日昼まで降り続いた雨は八王子市では降水量が300mmを超え、川口川の増水がテレビニュースで流れました。幸いにも大きな被害はありませんでした。

活動拠点では梅雨入りが近づくとモリアオガエルの産卵が始まります。大きな池がないので田んぼや湿地に張り出した枝に産卵が見られます。産卵場所の高さは5メートルから10メートルの場所に産卵が見られます。



モリアオガエル

高さ8m近くの泡巣

以前、休耕田を利用して5平方ほどの小さなため池を掘ったら、翌年からハウノキの枝やため池のカサゲにモリアオガエルが産卵、春先にはトウキョウサンショウウオの産卵も確認できました。

いまでは大雨が降っても水が溜らなくなり、数年前からモリアオガエルやトウキョウサンショウウオの産卵は見られなくなりました。

水環境の悪化は生態系に大きな変化や痛手を与えています。今年、急場しのぎで掘った池が新たな産卵場所になることを期待しています。

## 遅く生長する稲

田植えでしっかり植え付けていない苗は数日後には、苗が水に浮かんで、やがては葉が黄色くなり、枯れてしまいます。田植え作業の良し悪しが稲の生長に現れます。枯れた苗は田植えで余った苗を水路に残し保管した苗を使い補植します。

田植えから1ヶ月が経過すると稲は葉の数を増やし、分けつを始めて、茎の数を増やしていきます。

雨が降ると稲は生長して、日毎に変化が見られ水管理が大切な日課になります。

水田には稲の生長を妨げるコナギ、オモダカ、アゼナ、キクモが発芽してきます。絶滅危惧種のミスニラもここでは厄介者です。

田んぼの中はシュレーゲルアオガエルのオタマジャクシ、トンボのヤゴが動き回り、時折カルガモが飛来して餌取りを始めます。



カルガモの餌取り

まだ稲は生長段階、田んぼの中の土が見えますが、学校が夏休みに入る頃、稲は分けつして株が大きくなり、茎の中に稲穂が出来始まります。稲の背丈が高く、茎や葉に光が当たらない風通しが悪い場所は稲が病気にかかり易くなります。活動拠点では株の間隔を広くして田植えを行っています。



ミスニラなどの水田雑草